

○ 北陸でヒナノシャクジョウが採集された(鳥嶋昭信) Akinobu TORIBATAKE: *Burmennia championii* Found in Hokuriku District.

ヒナノシャクジョウ *Burmennia championii* THWAITES は北関東以南(北限産地:茨城県佐白山)に分布し、既知の産地は太平洋側で、日本海側に知られていない。ところが、私は石川県能美郡辰口町で発見した。日本海側で、まして北陸地方で発見されようとは思いがけないことであった。

産地はコナラ二次林で、探索の結果3株を確認した。付近に見られた植物はアオハダ、アカメガシワ、ウリカエデ、エゴノキ、オオバクロモジ、クルマバハグマ、コシアブラ、コバノガマズミ、サルトリイバラ、シシガシラ、シロサワフタギ、スギ、ソヨゴ、ゼンマイ、ツクシハギ、ツクバネウツギ、ツルアリドウシ、ナツハゼ、ネジキ、ノリウツギ、ハイイヌツゲ、ヒサカキ、ホツツジ、ヤブコウジ、ヤマウルシ、ヤマツツジ、ユキグニミツバツツジ、リョウブであった。

(〒923 石川県能美郡辰口町字松ヶ岡1-6。Matsugaoka 1-6, Tatsunokuchi, Nomi, Ishikawa 923)

○ 佐藤 卓 キナバル山の植物 平成3年7月29日発行。A 4判, 128頁。頒価3,000円+〒600円(〒939-05 富山市水橋的場195に直接申込のこと)。

キナバル山はボルネオ島の高山で、標高は4,101mである。マレーシア国サバ州に位置し、その自然は多様性に富んでいることで良く知られている。著者は1980年より2ヶ年、マレーシア国立大資源科学部に植物学講師として勤務したが、この期間中ならびに帰国後も再々訪ねて、多くの写真を撮影した。本書はそれらの中より精選し、8章の項目(第1章 キナバル山の植生帯、第2章 ランの宝庫、第3章 シャクナゲの世界、第4章 世界の巨花ラフレシア、第5章 食虫植物ウツボカズラ、第6章 山地林の植物、第7章 超塩基性岩地帯の植物、第8章 岩砕堆積地と岩盤上の植物)にしたがって紹介している。本書の頁をめくっていると、私は30年もの昔話であるが、正宗巖敬先生を隊長として、科研費の申請書をつくったことを思い出した。今ではこの時の情熱は消え失せてしまって、夢物語となってしまった。

○ 和田 清 ケヤキの森(新信濃写真風土記7) 信濃教育会出版部(〒380長野市旭町1098)、平成3年6月5日発行。19×23cm, 92頁。定価2,500円+〒250円)

ケヤキの語源は“異(ケヤケ)木”から出たと言われる。うつそうとして繁り、ひときわ抜きで目立つ樹であるが故で、特に全国の鎮守の森には神木として崇められているものが多い。長野県では内陸部の雨量の少い、長野・上田・佐久・松本・諏訪・伊那盆地に集中して見られ、県指定天然記念物は3件、目通りの幹周が8m以上のものは20本もある。本書は著者が撮影したケヤキの写真集で、信州の自然に生きるケヤキの美しい景観や感性を再認識させてくれる。

○ 上野雄規編 北本州産高等植物チェックリスト 東北植物研究会(〒789-02宮城県白石市城北町7-28)、平成3年8月1日発行。B 5判, 309頁+索引55頁。頒価6,000円+〒410円。

本書は青森・岩手・秋田・宮城・山形・福島・茨城・栃木・群馬・新潟の10県から、1988年までに、自生・帰化・逸出として報告された維管束植物179科、1038属、4,228種(変種を含む)を、収録したもので、それらの分布が、編者の考案による模式的な地図で示されている。

○ 初島住彦 北琉球の植物 朝日印刷書籍出版(〒890鹿児島市上荒田町854-1)、平成3年3月発行。B 5判, 258頁+図版116頁。定価10,000円(送料を含む)。

本書は種子島・屋久島・トカラ列島の解説(1-53頁)、にその維管束植物目録(54~188頁)と文献目録(189~218頁)を加えたものである。申すまでもなく、この地域には周知の分布境界線である渡瀬線が通っていて、分布の南限または北限となる種類が極めて多く、植物地理学上興味ある所である。(里見信生)

○ 池上義信(監修)・石沢 進(編集)新潟県植物分布図集 第1~10集 登載植物および索引。46頁。限定500部。頒価(〒別)2,000円。

分布図集と判型も装訂も同じ、発行所も同じで、今までに出版された全10集の索引が第11集(本誌39巻30頁参照)と同時に発行された。内容は8部に分かれ、分布図集登載植物目録、分布資料(1~9)登載植物目録、各学名および和名索引、著者名索引、論説・解説・雑録の登載植物和名索引となっている。なお、付録として1990年現在の資料に基づき、ユキツバキ・ユキバツツバキ・ヤブツバキの新潟県内の分布図と標本記録のほか、全国的な分布資料もつけられていて、大いに参考になる。(清水建美)

- 132-139.
- 一. 1949. New and noteworthy plants from southern Japan and adjacent district. *J.Jpn. Bot.* **24**: 81-87.
- 広木詔三. 1985. 西三河南部丘陵地帯におけるシイ類の分布とその雑種形成について. 地域社会の分散と統合—西川河南部地域の社会・文化・自然—「東海研究II」: 217-226.
- 一. 1988. 知多半島におけるツブラジイとスダジイの分布. 名古屋圏の構造と特質—名古屋市および周辺地域の社会・文化・自然—名古屋大学教養部「東海研究III」: 35-42.
- 一. 松原輝男. 1982. プナ科植物の生態学的研究III. 種子—実生期の比較生態学的研究. *日生態会誌* **32**: 227-240.
- HORIKAWA, Y. 1972. *Atlas of the Japanese Flora*. 500pp. Gakken, Tokyo.
- 市野和夫. 1991. 東三河地方の森林植生について—II. スダシイ林とコジイ林—. 愛知大学総合郷土研究所紀要第36輯: 112-118.
- 北村四郎・村田 源. 1979. 原色日本植物図鑑木本編 (II), 保育社, 東京.
- 小林弥一・須川豊伸. 1959. 本邦産クリガシ属樹材の識別に関する研究. *林業試験場研究報告 No. 118*: 139-187.
- MAKINO, T. 1928. A contribution to the knowledge of the flora of Japan. *J.Jpn. Bot.* **5**: 23-26.
- 松下まり子. 1989. 御前崎榛原町周辺の後氷期における植生変遷史. *日生態会誌* **39**: 183-188.
- ・前田保夫・松本英二・松島義章. 1988. 新宮 (紀伊半島) および室戸岬の完新世植生史—とくにシイ林の成立について. *日生態会誌* **38**: 1-8.
- MAYR, E. 1963. *Animal species and evolution*. 797pp. Belknap & Harvard Univ. Press, Cambridge, Massachusetts.
- 南知多町教育委員会. 1980. 山下勝年編「先苅貝塚」. 南知多町文化財調査報告書第四集.
- 三好教夫. 1981. シイノキ属, マテバシイ属, クリ属 (プナ科) の花粉の形態. *ヒコピア Suppl.1*: 381-386.
- 中井猛之進. 1939. 日本産ノくりがし属植物並ビニ常緑かし類ニ就イテ (其一). *植研雑* **15**: 185-204; (其二) 257-277.
- 大井次三郎. 1953, 1965. *日本植物誌*. 至文堂, 東京.
- 一. 1975. *日本植物誌頭花篇 (改訂増補新版)*. 至文堂, 東京.
- 森林生態研究会. 1989. 岐阜県および近県におけるシイ類の分布と変異について. 1-9.
- STEBBINS, G. L. 1950. *Variation and evolution in plants*. 643pp. Columbia Univ. Press, New York, London.
- 渡辺 誠. 1977. *縄文時代の植物食*. 187 pp. 雄山閣, 東京.
- 山中二男. 1966. シイノキについての問題と考察. *高知大学教育学部研究報告* **18**: 65-73.
- 一. 1975. 四国南部のタブ林とシイ林. *高知大学教育学部研究報告* **27**: 9-15.
- 山崎 敬・真柴茂彦. 1987 a. 日本, 朝鮮, 台湾におけるシイノキ類の分類の再検討 (I). *植研雑* **62**: 289-298.
- 一. 1987 b. 日本, 朝鮮, 台湾におけるシイノキ類の分類の再検討 (II). *植研雑* **62**: 332-339.
- 吉岡邦二. 1954. 東北地方森林の群落学的研究 (第4報) スダジイ北限地帯の森林. *植生生態会報* **3**: 219-229.

(Received February 27, 1991)

○ 芝谷地湿原植物群落保存調査会編 芝谷地湿原植物群落に関する調査報告書 平成3年3月, 大館市教育委員会発行. B5判, 94頁. 非売品。

芝谷地湿原は大館市の中心より北6 km にあり, 昭和11年9月, 国の天然記念物に指定されている。

本書には指定後, 50年を経過しているもので, 現状は指定時とくらべて, 適正に保存されているかどうか, 保護の観点から対策や整備について述べられている。

○ 富山市科学文化センター編 富山市浜黒崎海岸自然調査報告書 平成3年3月発行. B5判, 123頁. 非売品。

風光明媚な浜黒崎海岸は富山市民の憩いの場となっているところで, 松並木は文化財に指定されている。

富山市科学文化センターではこの市内に残る貴重な自然の保護のために, 昭和54年度に自然調査を行なっているが, それより10年を経過しているもので, この間の変化を見るために, 平成2年に自然の総合的な調査を実施した。本書はその報告書で, 内容は植物, 動物 (昆虫, 海底動物, 淡水無脊椎動物, 大型土壤動物, 淡水魚, 沿岸魚, 両生・爬虫類・鳥類・哺乳類) に加えて, 沿岸塩分濃度, 酸性雨の記録が加えられている。

(里見信生)

摘 要

細胞学的には明確に区別できるヘビイチゴ属植物 1 サイトタイプを含む 3 分類群の、形態的特徴を明らかにすべく、その外部形態を詳細に比較検討した。

ヘビイチゴは小型で、根茎はやや肥大し、葉は黄緑色で薄く、広倒卵形で重鋸歯性の強い頂小葉を持つ。葉柄の基部は赤褐色を帯びる。また、花卉は大きく凹み、倒心臓形である。花粉粒は小さく、小型の白桃色の肥大した花托を持ち、瘦果は網目状の皺が強い。一方、ヤブヘビイチゴは大型で根茎は肥大せず、緑〜濃緑色の厚い葉を持つ。頂小葉は重鋸歯があまり出現せず、菱形状卵形を示す。葉柄の基部は赤紫色を帯びる。花卉は倒卵形で凹みは小さい。花粉粒は大きく、肥大した花托は大型で、光沢を持つ

た濃紅色を呈する。瘦果は大きく、皺は極めて弱い。

両種の雑種のアイノコヘビイチゴの形態は、ヤブヘビイチゴとヘビイチゴの中間よりヤブヘビイチゴに近い。そして、アイノコヘビイチゴの 7 倍体は 8 倍体に比べ、ヤブヘビイチゴの形態により近い。このことは染色体の研究 (NARUHASHI & IWATSUBO, 1991a, 1991b) の結果と一致する。

これらの 1 サイトタイプを含む 3 分類群の形態上の差はいずれも量的なものであり、それぞれの変異の幅は重なり合う。故に、単一の形質で明確にこれらの分類群を識別することは不可能である。しかし、複数の形質を組み合わせて集団を分析することにより、これらの分類群を把握することができる。

(Received June 8, 1991)

○ Hideaki OHBA and Samer B. MALLA: *The Himalayan Plants Vol. 2* A 4 変型 269 頁。University of Tokyo Press 1991. 24,720 円。

東京大学では 1960 年以來、ネパール・ブータン・シッキムなど東ヒマラヤの植物の調査を続けている。その成果は不定期ではあるが大部な学術報告書 *Flora of Eastern Himalaya Part 1~3* (1966, '71, '75) として出版されている。この 3 冊はどちらかといえば、フロラを主題とした報告書であったが、1988 年に出された本書の第 1 巻では、書名も改められ、フロラのみならず、群落や材構造などの幅広い内容を含み、現地の研究者を編者に加え、執筆陣にも地方の若手研究者が参加するなど、名実ともに新しいスタイルとなった。今回の第 2 巻は、内容の構成は第 1 巻と同ようであるが、カラー口絵写真をさらに豊富に入れるなど、カラフルなものとなっている。

本書は、1983, '84, '85, '86, '88 の 5 次にわたる植物調査の結果として出版されたものであり、それぞれ口絵のカラーまたは白黒写真 (計 107 図版) を伴う以下の 7 篇の報文から成っている。

Micro-scale Vegetation Patterns on Talus in the Alpine Region of the Himalaya (9 頁)

Comparative Morphology of Flowers and Chromosome Numbers in *Duchesnea indica* (Rosaceae) from Nepal and Japan (5 頁)

Wood Structure of Himalayan Plants II (49 頁)

Taxonomic Notes of the East Himalayan Species of *Impatiens* (30 頁)

Taxonomic Notes on Some Alpine Species of *Ranunculus* in the Himalaya (21 頁)

A Revision of the Genus *Kobresia* (51 頁)

A Revision of the Genus *Poa* in the Himalaya (95 頁)

これらの報文は、互いの関連性はないが、この種の調査は、長い時間をかけ積み重ねていくことによって、はじめて全体像が浮び上がってくる性質のものである。本書のような着実な出版の積み重ねは、やがてヒマラヤ植物学の集大成に結晶していくことだろう。大いに期待したい。(清水 建美)

○ 久山喜久雄(編)フィールドガイド大文字山 法然院森の教室 1991年8月16日、ナカニシア出版発行。口絵カラー 2 頁+本文 174 頁, 1800 円。

大文字のお盆の送り火で名高い京都の大文字山のフィールドガイドブックが出版された。この本は、1985 年に始った「法然院森の教室」における自然講座や野外活動、そして手作りの里山調査の活動の結晶ともいえるべきもので、編者の久山さんほか法然院の貫主さん、動植物の研究者、元環境庁のスタッフ、仏教大学学生、ノーベル賞受賞者等々 14 名の多彩なメンバーの執筆になる。大文字は京都市民はもちろん、広く日本の心のふるさとでもある。とくに第 3 部の「大文字に想う」は、他のフィールドガイドにはみられない構成であり、収められた 4 篇の随筆には心が暖まる。本書が単なるガイドブックに留まらず、自然そして人間の在り方や地域を改めて新鮮な目で捉えるようにとの編者の願いがかなえられるよう、広く巷間に推奨したい。(清水建美)

この朝、約束の午前8時30分に金沢大学角間新キャンパス・C駐車場に集合したのは、予想通り自動車27台(他に4台が駐車場に駐車)・参加者92人の大部隊。これをコース別に赤、白、青の3隊に編成し、それぞれ地元の高木、高木、依田の各会員が各隊の案内(責任)者となった。会長挨拶や事務連絡ののち、各車両に所属の隊を示す赤、白、青のリボンをなびかせて、出発したのは予定の9時を少し過ぎたところで、まことに壮観であった。うち赤隊は車両11台・参加者38名、白隊は車両6台・参加者26名、青隊は車両10台・参加者28名の編成であった。各隊の行動は通過時間や観察地点をずらせることで、重複による混雑を避けるように予め調整した。各隊のコースはつぎの通りである。

赤隊：角間キャンパス(出発)→医王山口→見上峠→西尾平→夕霧峠→奥医王山→夕霧峠→国見→二俣→角間キャンパス(解散)

白隊：角間キャンパス(出発)→医王山口→見上峠→西尾平→硯→夕霧峠→白はげ山→夕霧峠→国見→二俣(解散)→(角間キャンパス)

青隊：角間キャンパス(出発)→医王山口→見上峠→夕霧峠→国見→大池→硯→西尾平→夕霧峠→国見→二俣への分岐点(解散)→(角間キャンパス)

予定の解散地点は角間キャンパスであったがその通りとなったのは赤隊だけで、他はコースの事情や参加者のその後の日程などを配慮して各隊の責任者の判断で適宜解散した。責任者はすべて角間キャンパスに戻ってくるようになっていたが、その最終は午後5時少し前になった。

医王山は金沢市の東方、富山県との県境にそびえる山塊で白山山系の北端に位置し、最高地点は奥医王山の939.1mである。山麓には第四紀の火山である戸室山548mがある。医王山の主要部は医王山累層(第三紀中新世前期)の火砕岩類・流紋岩よりなる。植生分布は奥医王山・白はげ山を含む上部はチシマザサ・ブナ群団に属するブナ林であるが、中部以下はブナ・ミズナラ林、クレーミズナラ林などの代償植生となっている。400m以下は代償植生のコナラ林が優占する。植林としてはスギ林が多い。山麓の植生域の原植生には不明の点が少ないが、二俣の医王山神社の社叢林に見るようなウラジロガシ林がそのひとつと考えられている。植物相はきわめて豊かで現在のところシダ植物以上で819種が確認されているが実際はこれよりはるかに多いものと推定されている。泉鏡花の小説「葉草取」の舞台としても有名であるが、それはこの山の植物の豊かさと神秘的な山深さによるものであろう。

コースは時間の制約のもとで可能なかぎりその植物相・植生が観察できるように選択された。

赤隊は、ブナ林の尾根を観察しながらゆっくり歩いて奥医王山山頂に到着。昼食ののち、里見先生から医王山の地名と日本海要素について、村田先生から変異と進化などについて、このコースの知見をも引用しての含蓄に富んだお話をいただいた。若くて元気な参加者の多い白、青の各隊は足にものをいわせて長いコースを踏破し、トンビ岩下の大地では浮島に生育するミツガシワやムジナスゲを観察するなど、それぞれに有益な一日であった。(〒920金沢市本多町2-2-3金城高等学校 Kinjo High School, Hondamachi 2-2-3, Kanazawa 920)

○ 中沢信午「生き生き」の世界 生物学からの発想 新日本新書437。新書判205頁。新日本出版社。1991年9月発行。680円。

山形大学在職中、植物の細胞分化の研究をされ、「形態形成の原理」や「細胞分化」の著書で知られ、メンデル研究者としても名高い著者は、現在は京都に在住され執筆活動を続けておられる。

本書は、御専門の細胞の極性あるいは極性軸の観点を、「すべて生き生きとした世界には一つの極性軸があり、万事がそれによって制御されている」という自然観、世界観に発展させた誠にユニークな科学随筆である。たとえば、新訳聖書の「はじめにロゴスありき」は結局はロゴスとは極性軸のことであり、宇宙や生命の根源は極性軸の形成からはじまること、細胞の発生や能動輸送は極性軸にそって進行することなどの生命現象はもちろろん、東ベルリンから西ベルリンへの民衆の移動、光と影、喜びと悲しみもすべて極性軸上にあるといった調子で、一つ一つなるほどとうなづかされる。本の構成は1. アナロジー、2. 極性軸、3. ラセン形、4. 生き生きとした世界の4章立てであるが、著者の主張は一貫してこの極性軸にある。私はかつて、ネオテニーとハイパーモルフォシスといったみかたで万物をみることができなかつたかと考えてみたことがあったが、この極性軸による観点には及ぶべくもない。地球の自転方向、川の流れ、列車の運行、音楽、ことば、小説、歴史の流れ、時間の経過、エネルギーの伝導など不事極性軸に従って動いているという指摘は私にとって一つの驚きでもあった。今度、教養課程の生物学の講義を受けもつようなことがあれば、この本をテキストに使ってみたいと思う。それほどに小さいながら生物学にも人生にも示唆にあふれた本なのである。(清水建美)

津高等学校

- 井原 正昭 〒411 三島市中 332-1 → 〒292 木更津市中央 2-7-9
 井関 智裕 〒150 渋谷区神宮前 2-8-2 パシフィック コンサルタント株式会社 開発計画部環境課 → 〒181 三鷹市下連雀 4-15-31 有本ビル 202 (株)ネイテック 気付
 河原 孝行 〒112 文京区白山 3-7-1 東大理学部附属植物園 → 〒305 茨城県稲敷郡茎崎町松の里 1 農林水産省森林総合研究所 集団遺伝研究室
 小林 純子 〒158 世田谷区深沢 2-1-1 東京都立大学牧野標本館 → 〒248 鎌倉市雪ノ下 4-2-23
 小泉 武栄 〒197 秋川市野辺 1117-3 → 〒197 秋川市野辺 1034-11
 近藤 義孝 〒411-01 三重県桑名郡多度町北鶺鴒 521 → 511-01 三重県桑名郡多度町北猪飼 521
 中西由美子 〒920 金沢市丸の内 1-1 金沢大学理学部生物 → 〒910 福井市足羽上 145 福井市立郷土自然科学博物館
 中田 政司 〒730 広島市中区東千田町 1-1-89 広島大学理学部植物 → 〒724 東広島市鏡山 1-3-1 広島大学理学部植物
 中山 修一 〒277 柏市ひばりが丘 7-11 ハイツ柏 101 → 〒229 相模原市西大沼 2-20-5 フラワーベルマン ション 302
 西川 洋子 〒080 帯広市東 4 南 6 シャトー脇坂 206 → 〒060 札幌市北区 19 条西 12 丁目 北海道環境科学研究所 センター
 大久保嘉雄 〒910 福井市御幸 2-25-8 福井県立高志高等学校 → 〒910 福井市福新町 2505 福井県教育研究所
 大内 準 〒811-31 福岡県粕屋郡古賀町花見中町 3 組の 2 → 〒811-31 福岡県粕屋郡古賀町花見南 2-27-37
 下田 路子 〒730 広島市中区東千田 1-1-89 広島大学理学部植物学教室 → 〒730 広島市中区舟入町 6-5 東和科学株式会社
 鈴木 武 〒112 文京区白山 3-7-1 東大理学部附属植物園 → 〒650 神戸市中央区中山手通 6-1-1 兵庫県庁生田庁舎 6 F 県立自然系博物館準備室
 鈴木 和雄 〒158 世田谷区深沢 2-1-1 東京都立大学 牧野標本館 → 〒192-03 八王子市南大沢 1-1 東京都立大学 牧野標本館
 鈴木 善雄 〒206 多摩市聖ヶ丘 3-52-2-101 → 〒206 多摩市聖ヶ丘 3-52-2-102
 田島 光夫 〒910 福井市文京 5-14-32 文京パセオ 203 → 〒910 福井市みのり 1-24-34
 田中 教之 〒192-13 八王子市大塚 359 帝京大学教養部生物 → 〒192-13 八王子市大塚 359 帝京大学文学部
 谷川 智彦 〒910-11 吉田郡松岡町末政 → 〒911 勝山市旭町 2-5-44
 若林三千男 〒158 世田谷区深沢 2-1-1 東京都立大学 牧野標本館 → 〒192-03 八王子市南大沢 1-1 東京都立大学 牧野標本館
 渡辺 幹男 〒326 足利市相生町 388 → 〒260 千葉市弥生町 1-33 千葉大学理学部生物 系統学研究室
 安井 隆弥 〒111-21 東京都小笠原村父島字奥村 → 111-21 東京都小笠原村父島清瀬都住 3-102
 吉野由紀夫 〒730 広島市中区千田町 1-1-8 広島大学理学部植物 → 〒730 広島市中区舟入町 6-5 (株)3-7 コンサルタント内

○ 菊地慶四郎・須藤志成幸 ^{とよ}永遠の尾瀬・自然とその保護 1991年10月1日発行, A 5判, 口絵カラー 8頁+本文 235頁, 上毛新聞社, 1200円。

群馬県立沼田女子高校の菊地さんと群馬県立前橋第二高校の須藤さんのお二人が協力して、尾瀬の自然に関する案内書を出版された。本書は、I, 尾瀬のなり立ち II, 尾瀬の自然 III, 尾瀬の保護 IV, 登山(観察)コースの4章からなるが、お二人はともに尾瀬保護専門委員として長らく尾瀬とつき合って来られただけに、当然のことながらII, III章がその主要部をなす。植物関係では、植生の解説とフロアの解説があり、花ごよみもあれば、自生高等植物目録があり、啓蒙書とはいいいながら、原・水島(1954)以来の本格的な解説書になっているのが嬉しい。尾瀬は戦後日本の自然保護の原点である。尾瀬を訪れる方は、ぜひともこの書を携え、尾瀬の自然を学習されると同時に、現代日本における自然保護の意味に思いを至らせるよう希望したい。

(清水建美)

改正内容

(第11条のあとに新たに次の第12条を入れ、以下順次番号を一つずつ繰り下げる。)

第12条 本会に評議員会をおく。評議員会は会長の諮問に応じ、会務の重要事項を審議する。評議員会は総会において選出された評議員若干名で構成し、任期は2年とし、再任を妨げない。

別表 過去10年間の会員数の動向(1991年4月1日現在)

年 度	1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991
新 入 会 員	41	20	21	24	12	20	22	21	10	24	7
退 会 会 員	14	15	17	14	15	13	4	4	8	15	6
会費滞納除名*	18	3	5	6	7	14	8	10	6		
年 度 内 増 減	9	2	-1	4	-10	-7	10	7	-4	9	1
会 員 数	558	560	559	563	553	546	556	563	559	568	569

*会費を1年半以上滞納して除名された者で、上段の退会会員とは区別される。なお、滞納した会費を支払えば再入会できる。

1992年度の大会の案内

1992年6月6日(土)~7日(日)

6日午後1時より:総会, 一般講演, 特別講演: 於金沢大学教養部
引き続き懇親会(於金沢市内)

7日: エクスカーション: 金沢市近郊犀川上流部を予定

一般講演: 1演題15分程度で8演題位を公募

特別講演: 2題の講演を予定し, 講演予定者と交渉中。

大会の詳細については1992年3月頃, 改めてご案内いたしますが, 一般講演発表希望者は題名, 発表者名を1992年2月末日までに, 下記庶務幹事まで文書でお申込下さい。

〒920 金沢市丸の内1-1 金沢大学教養部生物学教室 鈴木 三男

FAX 0762-64-1039 (生物 鈴木 三男宛とお書き下さい)

正 誤

39巻1号 p.3, 右, 2行目 *N. shimadae* → *N. shimadai*

p.6, 左, 下から3行目 1989年 → 1987年

○ 牧野植物同好会(編) MAKINO 80 東京植物同好会・牧野植物同好会八十周年記念誌 B5判。全314頁。アボック社 平成3年7月20日発行。頒価3,000円, 千310円。

明治44年発足の東京植物同好会は, 昭和30年に牧野植物同好会にひきつがれ, 今年で80年目となる。この二つの会の傘寿を記念してこのほど, 表記の本が出版された。

本書は牧野先生の「植物はわが友」(植物記1より), 久内清孝氏の「偉人牧野先生を偲ぶ」ほか1篇(久内名誉教授追悼集より), 佐藤達夫氏の「牧野博士の執念」ほか1篇(「自然の心」より)の随想が巻頭をかざり, 1. 同好会の歩み—写真篇, 2. 同——資料篇, 3. 同好会員の随想(同好会員40名の筆になる), 4. 「MAKINO」論文集(伊藤 洋氏ほか5名の研究者の論文から成る)の4章が続く。まさに, 牧野先生が主催されていた頃から現在に至るまでの会のドキュメントである。見返しには, 先生28才の折のムジナモの詳細な線画, 口絵には牧野植物図鑑にみられるツチトリモチとニシキマンサクのカラー植物図が収められ, 全巻を通してコンパクトな牧野植物学案内となっている。なお, 第4章は同時に「植物遊訪」の書名で単独の1冊として出版された。ともにアボック社から入手できる。(清水建美)

- 下田路子 Michiko SHIMODA: 広島県西条盆地のコウホネ属植物, *Nuphar* from the Saijo Basin, Hiroshima Prefecture, Western Japan1
- 白崎 仁 Hitoshi SHIRASAKI—→渡辺 茂 Shigeru WATANABE
- 杉本 守・石須秀知・鳴橋直弘 Mamoru SUGIMOTO, Hidetomo ISHIZU and Naohiro NARUHASHI: パラ科ヘビイチゴ属植物の形態, Morphological Study of *Duchesnea* (Rosaceae).....87
- 杉山明子・金井弘夫 Mitsuko SUGIYAMA and Hiroo KANAI: ハコベ属の分枝様式と一次維管束系について, Branching Pattern and the Primary Vascular System of Genus *Stellaria*13
- 鈴木憲仁 Norihito SUZUKI: ヒメシロネ (シソ科) の葉の腺形成, Gland Formation on the Leaf of *Lycopus maackianus* (Labiatae)21
- T チェクスム タワン・佐藤 卓・鳴橋直弘 Cheksun TAWAN, Takashi SATO and Naohiro NARUHASHI: ボルネオキナバル山の *Rubus satotakashii* とその関連種の分類学研究 II, 花と果実, Taxonomical studies of *Rubus satotakashii* and Related Species in Mt. Kinabaru, Borneo II. Flower and Fruit31
- 鳥島昭信 Akinobu TORIBATAKE: 北陸でヒナノシヤクジョウが採集された, *Burmanna championii* Found in Hokuriku District78
- 坪井 聡・沖津 進 Satoshi TSUBOI and Susumu OKITSU: 河畔におけるタニガワハンノキ分布地の立地条件, Site Conditions of *Alnus inokumae* in Riversides117
- 辻誠一郎・松下まり子 Sei-ichiro TSUJI and Mariko MATSUSHITA: ヤマグルマの花粉形態について, Notes on Pollen Morphology of *Trochodendron aralioides*27
- 辻誠一郎 Sei-ichiro TSUJI—→植田弥生 Yayoi UEDA
- 辻 誠治 Seiji TSUJI: 本州中部地方のコナラ二次林群落の地理的分布と気候要因の TWINSPAN および DCA による解析, TWINSPAN and DCA Analysis of Geographical Distribution and Climatic Factors of the Secondary Forests of *Quercus serrata* in Chubu District, Central Japan107
- U 植田弥生・辻誠一郎・村上宣雄 Yayoi UEDA, Sei-ichiro TSUJI and Nobuo MURAKAMI: 余呉湖北岸の埋没林から採取された木材化石, Wood Fossils Obtained from the Buried Forest along the Northern Coast of Lake Yogo105
- W 若杉孝生 Takao WAKASUGI: ニセシラゲガヤ福井県にも帰化, *Holcus mollis* Was also Naturalized in Fukui Prefecture20
- 渡辺 茂・白崎 仁 Shigeru WATANABE and Hitoshi SHIRASAKI: 精密なメッシュを用いて分布図を作成する新方法とコケ植物の分布の解析, A New Method to Process the Distribution Maps by Using the Fine Mesh and Analysis of Distribution Pattern of Bryophytes131
- 会記 Announcements61, 63, 123, 135
- 新刊紹介 Book Reviews8, 12, 30, 62, 78, 86, 95, 96, 116, 124, 142

○ A.M.コーツ 白幡洋三郎・白幡節子共訳 花の西洋史 花木篇 八坂書房 1991年3月5日。A5判。238頁。3600円(本体3495円)。

本書は、イギリスの園芸植物史家であり、自ら園芸家でもあった Alice M.Coats 女史(1905~1978)の「Garden Shrubs and Their Histories」の抄訳であり、「花の西洋史—草花篇 Flowers and Their Histories (訳書は、1989年出版)」の姉妹篇でもある。著者はプラントハンターたちの活躍を描いた大部の書「The Quest For Plants」(1969)でとくに有名である。

本書には *Abelia*, *Aesculus* といったように属名のアルファベット順に 45 属の植物についての園芸史が紹介されている。たとえば、アオキ *Aucuba* の項では斑入りアオキが 1783 年に日本から輸入されたこと、当時はクスノキ科とまちがえて「斑入り月桂樹」とよばれたこと、R. FORTUNE が、アオキの雄本を求めて 1861 年に来日したことなどが述べられ、それぞれの植物と人との関わりを知ることができる楽しい読み物である。(清水建美)